

# べんちゅー

お嬢さまは

小説 高岡智空

挿絵 草上明

立ち読み版



第一章 清純お嬢さまは勉強熱心

第二章 大胆お嬢さまと秘密の逢瀬

第三章 熱愛お嬢さまの濃密ご奉仕

第四章 秘匿お嬢さまの内緒の行動

第五章 ジェラシーお嬢さまの静かな怒り

エピソード

## 登場人物紹介

Characters



とみながありな  
**富永有菜**

広告会社のご令嬢で、いつもおっとりおだやか。言葉づかいも丁寧で、キューティクルに満ちた黒髪は大和撫子そのもの。



くさ ましゅうじ  
**草間修司**

友人たちに恋心を弄ばれ、ダメもとで有菜に告白することになった少年。

引き締まっついていて小さなお尻なのに、掴んだときの肉感は、見た目以上に手の平を刺激する。ポリウムある尻肉の谷間からは汗ばんだ空気が染みだし、それだけで修司の手にも、じつとりと汗が浮かんできた。

（うっはああああ……お尻、めちゃくちゃ気持ちいいっ……けど、こっちも……おお！）

太ももに手を触れさせれば、それだけで自動ドアのように、彼女の脚が開く。奥にゆつくりと指を進めてゆくと、その焦れつたさに彼女が腰を振り、唇と同じくらい積極的に秘部を寄せつけてきた。だがそこにすぐさま触れることはなく、脚の付け根を撫で回し、柔肉の感触をしつかりと手に刻みつけてゆく。すでに股間からはネットネットの牝エキスが溢れているらしく、指先に熱い粘液の湿りが伝わった。

「んうっ、ふぐううんっ……んじゆるっ、ぶああ……あひゆっ、しゅ、修司、さあん……は、はや、くっ……もつと、してくださいっ……私、おかしく……つくうんっ！んっ、あつ、お、おかしくっ、なつちやいますっ……んっく、あつ、ふああっつ！」

切なさに耐えかね、彼女が唇を離れたのを狙い澄まして、セーラー服の裾から滑り込ませた手で脇腹を刺激しながら、彼女の乳房を揉みしだく。ブラという守りを失った乳房は少しの圧力で柔らかくたわみ、タプンツと服の内側で弾んで、指を飲み込んでしまう。

「はうっ、あううんっつ！んっ、し、して、くださっ……んううっ、し、下もお……おね、が……ひうっ、し、しま、すう……」

掬い上げた乳房を揉み潰し、先端の突起を柔らかく捏ね回す。そのたびにピクピクツと

背中を跳ね上げ、有菜が喘ぎながら身を寄せ、何度もおねだりを口にした。艶めかしく吐息をこぼすそんな彼女の耳に、修司はそつとささやきかける。

「俺のも……ほら、自分でだして扱いてくれよ」

「んあうつつ！ あつ、は……はいい、あんつつ……はあ、はああ……」

乳首を摘んで転がすように捻り、潤んだ秘部を指先だけで下から上に擦り立てる。熱くヌルヌルとした感触が指腹を舐め、それを有菜の淫肉へ擦りつけるように、そつと触れてから強く指を押しつけてゆく。刹那、グチュウウウ……といやらしい水音を奏で、蕩けきつた媚肉が、修司の指先に絡みついた。

「くひゅうつつ!! んあつ、はつ……あいつ、い……いい、ですつ……くうんつ！」

耳元に有菜の音が響き、太ももがキュツと閉じられて修司の手首を挟み込む。けれどそれは嫌がっての行動ではなく、肉悦による反射的な行動だというのはすぐにわかった。手を引こうとすると、それを拒否するように手首を捕らえられ、しつとりと濡れた肌が手首を揉むように押しつけられる。

「はあつ、あはああ……んつ、も、もつと強くても……平気、ですから……あんつ！」

そのお言葉に甘え、少し強く割れ目に食い込ませた指で、表面の淫肉をグチュグチュと捏ねるように撫で上げてゆく。頭を跳ねさせ、腰をくねらせながら身震いする有菜の首筋に優しく口づけると、もう一度キャウンツと子犬のような彼女の嬌声が聞こえた。

「可愛い声だな、有菜……ここがいい？ それともこっちか？」

「あひつつ、んっ、や……やああ、あうっ、んひゃうつつ！」

垂れ落ちる熱い感触を掬い取りながら、媚裂の感度を確認するように、じつくりと愛撫を施すことにする。色々な研究資料——十八歳未満お断りの書物によると、女性器の穴はもう少し下方にあるはず。そしていまなぞっているこのあたりには、たしか——。

（つつ、あった、これかっ？　ちよつとコリツとしてて、埋まってる感じの……）

元々緩んでいた淫唇を、二本指でさらに大きく開かせ、懸命に指で探っていると、クリトリスらしき小粒の感触が伝わってきた。あまり強くすると痛い、そんな情報を頭の隅に置いていた修司は、有菜の反応を窺いながら少しづつ圧迫してゆく。

「ど、どうだ、あり——くおおつつ！」

「んひいつつ——ひあううつつ?!　あつ、ひゅつ、しゅ……うじ、さつ……んつつ！」

修司の指が敏感な女核を押し込んだと同時に、衝撃に震えた彼女の手が、ようやくペニスを剥きだしにして扱き立ててきた。自らの快感を訴えるような激しい手コキで、昼休みからのお預けで暴発寸前だった肉棒を、快楽の頂上まで上り詰めさせようとする。

「はあつ、修司、さあん……はあむつ、あむう、んっ……んじゆるっ、じゅばあ……」

大きく口を開き、唾液を引いた桃色の舌が視界に飛び込み、甘い吐息を絡ませながら唇に吸いつく。ジュルルツと唾液を飲む音に、クチュクチュと絡まる舌の粘質音が、耳から流れ込んでペニスに快楽を注ぎ込んでくる。口腔を弄る舌の動きに、修司もさらに指を丁寧な滑らせ、撫でれば撫でるほど硬く尖る淫核を、時折キツく摘みながら、粘膜壁に



押しつけて強く転がして刺激を送り込む。

「んうつつ、んんううううううううつつ！ んぐつつ、はつ、あむううつつ、じゆるつ……」

唾液が口端からこぼれ、セーラー服の胸元に淫らな染みを広げていった。膣口と思われる部分を擦り、淫核を撫で上げると有菜の腰がヒクンツと大きく跳ね、指に向かって淫唇が突きだされる。舌を吸いながらその部分に指先を捻じ込むと、すぐさま入口が締めつけられ、蕩けきった甘い圧力が、修司に指を快感で包み込んできた。

そんな膣肉の柔らかさを想起させるように、有菜の手は肉棒をコシユコシユと、先端から溢れる粘液を絡めて丁寧に扱く。さらに、彼女が半身ほど近づいてきたかと思うと、無防備だった亀頭にフワリと、布地の感触が広がった。

（うおっ、ふぐううつつ……こ、れ……なんだ、すげえっ……）

軽く視線を下に向けると、それはペニスを包むように被せられた、彼女の制服のスカートだった。柔らかな生地感触が亀頭に擦れ、その下では温かな手が激しい上下運動で性刺激を絶えず刻み込んでくる。たちまち修司の背筋にはえも知れぬ電流が流れ、お尻の奥から肉棒へ、そして頭の奥まで、狂おしいほどの快感に満たされてゆく。

（や、つべえ……イクツ、もう、そろそろ……あつく、くあつ、はああつ！）

視線を向けると、彼女の潤んだ瞳が視界に飛び込んだ。射精に至りそうだとすることを訴えかけると、微かに彼女が頷いたように思えた。と――。

「んぷつ、ぷあ……はあつ、い、いいです、どうぞ……スカートの中につ……」

唇を離し、それだけささやいた有菜はもう一度、強く修司の唇を吸い上げる。柔らかく張りのある少女の唇にチュパチュパと唇をなぞられ、肉棒が大きく跳ねた。その奥に溜まった牡欲を押しだすように、彼女の手が根元から亀頭までを余さず扱き抜く。

(んつくあつ、あつ、り……有菜っ、あああつっ！)

ズチウウウツと音を響かせて彼女の舌を吸い、淫核を思いきり押し潰す。その間も豊乳を遠慮呵責なく揉みしだき、ニプルを扱くような動きで弄り続ける。刹那、彼女の四肢が引きつったように強張り、それからビクンツツと痙攣するように跳ねた。

「あむうううつつ?! おうんっ、んぐっ、ぐじゅぷつつ……んつくううつつ！」

それと同時に修司も、ペニスから溢れそうになった欲望を、もはや止めることもなく快楽に任せ、亀頭を包み込む彼女のスカートの裏地へ、盛大にぶちまける。

——ビククウウツツ、ビクビクビクツツ……ドビュルウウツツ、ビクンツツ！

「ふぐっ、んっ、あつ……あむっ、んじゅっ……」

これまでの自慰とはまるで種類の違う、他人の手に、それも好きな相手によって扱かれるの射精に、頭の奥で快感が弾け飛ぶようだった。尿道を精液が駆け上がり、彼女の手によつて搾り抜かれる、そのたびに背筋に電流が走り、下半身が自然と震えてしまう。

尿道に擦りつけられたスカートが精液を吸い、湿り気を帯びてまとわりついて、彼女の手は止まらず、さらに二度三度と精液がもれた。その心地よさに溺れながらも、こちらが手を止めれば彼女からの快感が途絶えてしまうとも言わんばかりに、修司は指を

くねらせて、お嬢さまの汚れない秘部をグチョグチョと掻き回してゆく。有菜の秘部から噴き溢れるようにこぼれた愛液によって、指どころか手の平までが、水に浸したようにベトベトになっていた。

「はみゅううう……んっ、はっ、あ、も……もう、そろ、そ……ろっ……おんっ♥」

ツウ……と粘糸が橋をかける唇が離れ、熱い吐息とともに彼女が告げる。口を開くのも辛いというように、眉根を苦しげにひそめ、全身はヒクヒクと痙攣しているようだった。

「いや、けど俺だけイッチャったつても……有菜に申し訳ないっというか」

有菜の指が、敏感になったペニスから離れてゆくのに名残惜しさを感じながら、修司はさらに指を動かしてヒクつく股間を撫で、淫核にそっと指を伸ばす。だが――。

「はううんっ!! んあっ、はっ、も……もう、だ、だめっ……はあんっつ!」

それだけで彼女は感極まったように艶めかしく声を震わせ、倒れそうな身体を支えようと、修司の腰に腕を回して抱きついてきた。

「えっ、ちよっ……あ、有菜っ!?!」

慌ててそれを抱き返し、折れそうなほど細く、柔らかい身体を支えてやる。

「しゅ……修司、さんのっ……い、意地悪っ……また、こういうこと……言わせ、たいん……です、ねっ……くうんっ……」

息も絶え絶えになり、彼女が赤面した表情を上向かせ、小さくささやいた。

「です、からあ……わ、私も、もう……その、イ……イキ、ました……からっ……」

「えっ……あつ、ああつっ！　そ、そっか、その……なんか、悪い……」

彼女を絶頂に導いたという悦びに満たされる反面、それに気づかなかったという童貞力を晒してしまったこと、そして彼女を苦しませてしまったことで少しバツが悪くなり、ふいと顔を逸らしてしまう。けれど有菜はそれを気にした風もなく、修司の腕の中で身体を弛緩させると、顔を寄せて熱っぽく吐息をもらしていた。

「ん……いいです、気持ち……よかったです、からあ……修司さんは、どうでした？」

吐息に肌を撫でられ、驚いたように彼女を見つめ返す。絶頂直後の艶めかしい表情を向けられ、そんな彼女に見惚れつつも、修司は何度も頷いて答えた。

「よ、よかった、すっげえ気持ちよかったです！　けど、あ……せ、制服どうするっ？」

汚れてしまったスカートは、外から見ても妙な染みが広がっており、かなりキツイ臭いもこびりついているようだった。だが有菜は気にした様子もなく、ジャージで帰ればどうとでもなりますよ、と笑顔で答え――。

「そんなことより……また、しましうね？　何回でも、何十回でも……修司さんが求めてくださるの、待ってますから」

天使のような表情で、淫魔のような誘惑をしてくるのだった。



互いの身体で味わう快感に、二人はそれからもどっぷりと嵌まってしまっていた。

初めのときのように屋上で行為に至ることもあれば、その後のように図書室ですること

もある。それ以外には、体育の後の体育倉庫や更衣室、はたまた人気のない準備室など、広い学内では逢引きの場所に困ることさえなかった。

「有菜っ、有菜あ……はむっ、んぐっ……じゆるるっ、じゆるおお……」

「はうっ、んううっ……修司、さあん……ああむっ、はむっ、れろおお……」

互いの制服が汚れることを考慮し、いまでは当然のように最初から着替えを用意しているから、毎度毎度のキスでは遠慮なく唾液を溢れさせ、互いの顔も服もビチャビチャに濡れ汚してしまう。それでも加減しようと思わないのは、唇同士の激しいセックスを行いながら、互いの手で愛撫しあうことがあまりにも気持ちよかったからだ。

そのこともあり、しばらく二人はキスとペッティングのみで愛しあい、セックスに至ろうという考えも発言も、会話で生じたことはなかった。

そう、なかったのだが――。

…

「でえと、ですか？」

「ん、ああ……っていつても、そんな大袈裟なモンでもないけどな」

放課後の逢瀬で行為を終え、解放感と充実感に身を委ねてキスをしながら、修司はそんな風に切りだした。少し不思議そうに首を傾げていた有菜だが、やがて納得したようにポツと手を叩いて、顔を綻ばせる。

「デート、つまり逢引きですね！」

「えっ……ああ、そこで戸惑ってたのかよ。ま、付き合いだしてから、まだ休みの日は一緒だったことないし、どうかなって。今週末とか、都合どうだ？」

「平気です！ 今週はなにもありませんから、嬉しいですよ！」

逢引きとはまた古風な——いや、もしかすると本当に、そういった単語には縁がなかったのかもしれない。あれだけエッチな知識は豊富だったのに、こういう付き合いに関しては疎いというのは意外だが、そこがまた可愛らしかった。首に縋りつき、満面の笑みでバードキスを浴びせながら喜ぶ彼女を見てみると、やはり誘ってよかったと思う。

（よし、色々順番おかしくなっちゃったけど……なんにせよ、初デートだ！）

有菜にはあんなことを言ったが、自分が一番気合いを入れているという事実を悟らせまいと、見えない角度でグッとガッツポーズをしておく。とはいえ、もちろん遊びに行くだけで終えようなどという心積もりは、修司のほうにも用意していない。

目的は当然、初エッチを無事に迎えること。これに尽きる。

（……けど、いいのか？ 学校とかではよく一緒にいるけど、恋人として出かけるのって、今回が初めてなのに……ってえ！ ええい、なにをビビってる！）

持ち上がる不安を押さえつけるように、彼女の身体をキュッと抱き締め返した。柔らかくて温かい、その身に触れていると、幸せとともに不埒な感情も込み上げてくる。

（そうだよ、したいんだよ！ 俺は、有菜とエッチしたいんだよおっ！）

キスの誘いを受けたときに、もっと段階を踏んで互いをよく知ってから——などと言っ

ていたのはなんだったのだろうか。自分でもそう思いはするが、そんな自分の考えを吹き飛ばすくらい彼女の肢体が魅力的で、彼女の振舞いが愛しくてたまらなかったということだろう。まったくもって、男のサガというのは業が深いものだ。

ただ、この提案で懸念すべきことがあるとすれば、ただ一つ――。

「本当に嬉しいです……楽しみにしています、修司さん」

キスをやめ、顔を離れた有菜が、至近距離で眩い笑みを見せる。天使のような微笑みを浮かべる彼女だが、はたして彼女は、修司の目的に気づいているのだろうか。

（察してたり……するわけないよなあ？ またそつちも勉強してくれれば、スムーズに事が運んで……いやいや、そんな有菜にはつか甘えててどうするよ！）

学内での行為、それ以前にキスからして、すべて有菜の誘導に応えたような格好になつてしまっているのだ。ここでピシッと男らしくリードし、記念すべき初体験をムード満点で迎えてやらねば男が廃るといふもの。

（そうだ！ やるんだ俺っ、俺ならできる！ 自分のためだけじゃなく、有菜のためにも……俺と付き合つてよかったと、思わせてやらないと！）

心を叱咤し、やる気を胸に滾らせる。すでに行く場所はいくつか見繕っているし、あとは誘うだけだったのだ。それが成功したいま、もはやなんの憂いもない。

「じゃあ、ともかく日曜に。どこか行きたい場所あったら、また言ってくれよ」

「はい。でも私は……修司さんでしたら、どこへでも」

そんな嬉しいことをささやかれ、さらにハートを鷲掴みにされてしまった。見つめ返した彼女の瞳が黒曜石のようにキラキラと輝き、唾液に塗れた唇がテラテラと艶めかしく光る。その表情に見惚れていると、有菜が瞳をゆつくりと閉じた。

「……………んっ♥ はあっ、あむ……………んちゅっ、ちゅばっ、ちゅばあ……………」

幸せそうに頬を緩める有菜と、唇を啄みあうような甘い口づけをかわす。

(あ、そういや待ち合わせ場所とか……………ま、いいか)

それはまた後でもいいだろうと思ひ直し、いまはこの幸せを噛みしめることにする。修司の意識は再び、密着する唇の感触へと吸い込まれてゆくのだった。



「お、お待たせっ……………しました、修司、さん……………はあっ、はあっ……………」

待ち合わせの駅前で、息を切らせながら駆けつけた有菜の姿に、修司は言葉もなかった。それは彼女が額に汗し、丁寧に梳かしていたであろう髪を少しほつれさせ、約束した時間のギリギリに姿を見せたことが原因ではない。

(……………おう、なんとという……………)

初めて見る彼女の私服に、言葉もないほど見惚れてしまったせいだ。

白色のニットセーターはやや編み目が大きく、セーターというよりはケープに近いデザインにも見える。その真っ白な上着に合わせ、下半身には秋らしい明るいブラウンのスカートを着ているのが、実によく似合っていた。足元は短めのブーツ、その下には黒色の

ストッキングを着用しているらしく、ほとんど肌を晒してはいない。

けれども全体のバランスが見事に調和し、可憐でオシャレなお嬢さまの姿が、そこに存在している。なにより、肌など晒さずとも有菜の可愛らしさはまるで損なわれず、むしろあえて隠すことで、彼女の気品が引き立てられているようだった。

「朝は、きちんと起きたのですが……はあっ、はあ……時間の余裕を見て、ソファで休んでいるうちに……ふう、はあ……つい、ウトウトと……本当に、ごめんなさい……」

手に持った小さなバスケットを重そうにしながら、肩で息をして、彼女が懸命に頭を下げる。その声でようやく我に返り、修司は慌ててブンブンと首を振った。

「い——いやいやっ、全然待ってないから！ まだ……ほら、いま時間になったとこだし、俺もいま来たとこだし！ そんな謝ることなんてないから！」

その重そうな荷物を持ってやり、額の汗をハンカチで拭ってあげると、ようやく彼女が顔を上げた。そんな二人の姿に、周囲から視線と声突き刺さってくる。

「うわ、あんな可愛いコにすっごい謝らせてるよ……」「なにあの男、さいつてー」「あたし見てたけど、あいつ十分かそこらしか待ってないよ」

(待て待てっ！ 違うって、別に謝らせてねーから！)

針のムシロに座らされたような状況と、いまだ申し訳なさそうに目を伏せている有菜の姿に、言い知れぬ罪悪感が込み上げてくる。

「あ……あ、あっはははは……と、とにかく、移動しようぜ。ああっ、もうそんな顔しな

くていいからさつ、本当に待つてないんだつて！」

「はい、すみません……ごめんなさい、修司さん……」

こちらを見上げるお嬢さまの瞳が、いまにも涙を溢れさせそうなくらい、ウルウルと揺れている。これまで、彼女の笑顔や艶めかしい顔くらいしか見たことがないせいで、こういうときどうフオローすればいいのか、まるでわからなかった。

それでも、せっかくのデートで有菜にこんな顔はさせたくない、修司はとつさに彼女の手を取り、少し強く引いて歩きだす。

「ほら、歩けるか？ 時間はまだまだいっぱいあるんだから、こんなことで暗い顔してたらもつたないぞ！ 行こうぜ？」

「あ——」

思えば、抱き合ったりキスしたり、それ以上の行為だつて何度もしているのに、手を繋いだのは初めてだった。汗ばんだ手の平の柔らかさに、彼女を抱き締めているときよりドキドキさせられる。それは、彼女も同じ気持ちだったのだろうか。

「——は、はいっ！ あ……あり、が……っ……ありがとうございます、修司さん」

顔を振つて憂いを飛ばした有菜の表情に、あの明るい笑みが戻っていた。そして指が絡められ、離れぬようキュッと強く握られ、さりげなく彼女が寄り添ってくる。

そんな彼女を横目でチラリと見て、修司は頬が赤くなるのを感じながらささやいた。

「その服……めちやくちや似合つてる。可愛いぞ」

（はああつ、マジか……これ、有菜が……有菜の口が、俺のを……し、幸せすぎる！）

唇と頬を窄めて、亀頭の周囲は熱く蕩けた彼女の口襲に包まれている。それでいながら唾液は口端から流れるように微妙な隙間があり、有菜が顔を振り揺するたび、唾液が蜂蜜のようにゆつくりと滴って、トランクス越しの肉竿に降り注いでゆく。

「くあおつつ！ あつ、はあつ……すっげ、いい……有菜、気持ちいい……」

思わず彼女の頭に手を伸ばし、熱烈な愛撫を賛美するように頭を撫でてしまう。けれど嫌がる仕草も怒る素振りも見せずに、彼女は甘えるようにクウンと声を響かせ、二度三度と亀頭を舐め回してから、いったん唇を遠ざけた。

「んぐっ、れろおお……ちゅぽっ、んふう……ふふ、嬉しいです♥ 修司さん、私の足の指まで舐めてくれましたから……私も、修司さんの色々なところをおしゃぶりして、気持ちよくなってもらいたいです。ですから、まずはここからと思って……はあむっ、あむうう……んれろっ、ちゅぽおお……んひゅっ、れんひゅうひて、よはったあ……んっ」  
（——つつ!? れ、れん、しゅっ……練習って、な……だ、誰でつつ!!）

一瞬にして様々な妄想が頭に吹き荒れ、嫉妬と怒りとよくわからない感情が混ざりあい、下腹部が疼いて肉棒がさらに硬くそそり立つ。口内で一回り大きく膨らみ、自身の腹を叩こうとするほど激しくペニスが跳ねた瞬間、有菜の唇から弾かれたように大量の唾液がプチユウウツ！ と音を立てて噴きこぼれた。

「んみゅつつ、んぶあつ、はあむつつ、あむんんっ……んぐじゅっ、じゆるうう……」

それを啜り上げながら舌で綺麗に整え、先の肉傘をこそぐように舐めて、唇が離れた。舌から唾液の糸が伸び、舐め回された下着がグチョグチョに濡れて、ペニスに張りつき形を浮かばせている。その大きく膨らんだ先端部を握り、撫でながら、有菜の手がトランクスをゆつくりと脱がせてゆく。

「ん……っしょ……きやうっつ！」

ゴムが引つかかかって反動のついたペニスが、バチンッとお腹に跳ね返って音を響かせた。四つん這いに近い体勢で顔を低くし、その部分を有菜がジッと見つめてくる。これまでしてもらったときより、さらに強い興奮で血管を浮き上がらせたペニスが、彼女の視線を浴びるだけで大きく震える。彼女にしてみても、これほど至近距離で見るのはおそらく初めてのはずだ。そう、おそらく――。

「あ、有菜っ、その……練習って、いったい……」

「あう……そ、それは聞き流してくださいさっても……もうっ……バ、バナナですっ……」  
カアアツと頬を染めて顔を伏せ、いつまでも見惚れていてはいけなないとばかりに、彼女の唇が亀頭に絡みついた。布地越しとはまるで違う、熱い粘膜の火照りを真っ向から敏感な部分に受け、たまらず喘ぎながら修司は腰をヒクつかせる。

「あうおおっつ！ はっ、すっげ……唇、柔らかいっ……」

思わずそんな感想を口にするが、心にあるのは声を大にして叫びたい安堵の気持ちだ。  
(いよっ……よかつたああああ~~~~~っつ！)

チュツ、チュツと何度も口づけを浴びせながら、間近で目にする熱塊に瞳を奪われ、潤んだ眼差しが肉棒を舐めるように這ってゆく。だが実際に這い回るのは、鮮やかな桃色にヌメリを広げる可憐な舌腹だった。まるで一匹の蛇のように、唇から長く伸びだした舌が肉棒に密着し、先ほどの動きを再現するように龟头を押し捏ね、ピチャピチャと甲高い水音を奏でて、あちこちの剥きだし粘膜を擦り、蕩かそうとする。

「んあっ、はああああ……んえ、えへええおお……へおつ、んれろお……じゆるつ、じゆるうう、ぐちゅ……ちゅぶつ、じゆるつ、んぢゆるお……」

「うっはっつ……はあっ、あつ、やつべ……んっ、めつちや、いいっつ……」  
濡れた感触が裏筋を擦ったかと思うと、龟头粘膜が唇に含まれて、強く吸い上げられた。だがそれに合わせて慣れた手つきが、唾液を潤滑油に肉竿を抜き立てる。

そのまま、舌先が包皮の内側をこそぐように捻じ込まれ、開いた肉傘をなぞるように円を描く。何周も繰り返して、敏感な包皮の内側をくすぐられる快感が、お尻の穴から背中を突き抜け、頭の裏側に痺れのような甘刺激が流れ込んだ。それでも彼女の奉仕は止まらず、扱っていた手がペニスの根元へ滑り降りた瞬間、唇が龟头を飲み込んでゆく。

——ズブズブツ、ズジュルウウウ……グプンツ、クプウウ……  
「~~~~~っつ!! あいつ、ふっ……あ、りなっ、あっ……さ、いこっ……」

なんの抵抗も躊躇もなく、歩き回って蒸れたままの、シャワーも浴びていない汚れたペニスが半ばまで、スッポリと口内粘膜に包まれてしまった。手コキ快感とは質の違う、ま

とわりついて溶かしてくるような、液体的な快感に下半身を瞬く間に支配される。

尻もちをつき、膝を立てて開脚した体勢で彼女の口奉仕を浴び、修司は背後についた両手で思わず布団を握って腰を振る。まるでクンニを受けた女性——喫茶店での有菜を思わせる反応に顔が熱くなるが、こらえきれぬものではなかった。

そんな修司を上目遣いで見上げてきた有菜と、モロに視線を合わせてしまう。羞恥が濃くなり、カアアツと耳が熱くなるのを感じて、彼女に呆れられるかもしれないと、背筋がゾクツと震えた。けれど有菜がそんな態度を見せるわけもなく、ニッコリと慈愛に満ちた表情を浮かべて、そのまま頭を上下に揺さぶる。

「んはああ……うえひいれふ、ほんらにかんりへくらはっへ……あおつ、んおお……」

口にペニスを咥えたまま言葉を発する、その振動と舌の動きが新たな刺激を送り込み、言葉にならない呻きを上げて、修司はさらに強く腰を打ち上げてしまった。喉を抉るように突いてしまったが、それでも彼女は嫌がる素振りも見せず、その衝撃を受け止め、瞳を細めて蕩けた表情のまま、さらに何度も口を蠢かし、頭を振って快楽を注ぎ込んでくれる。大量の唾液が肉竿に染み込み、チュポンツ、チャポツと水音が絶え間なく響く。

唇はキュツと閉じきつたまま、頬が窄められて口内粘膜に肉棒全体が扱かれる。けれどもそれは継続せず、緩急をつけるように口内の密着空間は変化し続けていた。それは扱かれつつ、揉み捏ねられているような——どこかで感じたことのある快感と同じで、修司の下半身の快感神経を溶かし、彼女と一体になるような心地を覚えさせられる。

(はぐっ、あっっ……こ、これ、舌に……されてたのと、同じっ……あっっ！)

彼女と何十回、何百回と繰り返したディープキスの一部が、これと同じような動きだった。つまり彼女はフェラチオをしているというより、ペニスを舌と見立てたディープキスを浴びせているということ。その発想にズクンツと胸を突かれ、肉棒を美味しそうに食む彼女の唇を、思わず凝視してしまう。

「んぐぶっ、ぐぼっ、じゆるっ……んじゆるおおおっつ、れろっ、れろおっ♥ んあっ、あはあ……ろうか、ひまひたかあ……しゅうり、ひゃんっ？」

ポツカリと開いた口の中、溜まった唾液が滝のように流れて亀頭を、ペニス全体を、卑猥な光に満たしてゆく。そのまま裏筋をペロペロと大きく舐め上げられ、視覚的にも感覚的にも、身震いするような強烈な快感の波に襲われ、腰が跳ね上がって痙攣する。

(っっ……やっぱいい、なんか、すげえ……くるっ……)

下腹部から這い上がるのは射精感ではなく、彼女に愛されているという強い実感と、無性に彼女を抱き締めたいという気持ちだった。思わず手を伸ばし、彼女のあご先に触れると、ピクンツと肩を跳ねさせて有菜が瞳を細める。

「有菜、こっち……口離して、顔……」

「え、ですがまだ途中……ふあっ、あんっ……んむっ、ちゅぶうう……」

有菜の細い腰を抱き上げるように、身体を引き寄せると、名残惜しそうに肉棒を捏ね回しながらも、彼女は唇を寄せてくれた。直前まで自分のを舐めてくれたが、そんなこ



とはまるで気にならない。それどころか、あれだけ愛情たつぷりに快感を注いでくれた有菜の気持ちと唇に、ありつただけの感謝と感動を伝えようと、舌を突き入れて口腔を弄つてゆく。ドロドロの唾液がまだたつぷりと残り、シチューでも含んでいるかのような熱さと汁気が、修司の唇と舌に感触を伝えた。

「はぷっ、あむうううっ、んじゅろっ、れろおおお……ぐじゅっ、じゅぼっ……」  
「くちゅぷっ……ああみゅう、んっ、ちゅっ……ちゅぼっ、はむうう……んっっ！」

腰紐を解くと、襦袢の前が簡単にはだけた。修司も上着を脱ぎ、下半身の邪魔なものはすべて脱ぎ捨てる。シャツは面倒なので着たまま、少しの間も離れたくないとばかりに彼女に密着して、唇をちゅうちゅうと押しつけて唾液を吸り上げる。

「んふううっ、ふあっ、はぷっ、じゅぼおお……んっ、んくっ……ぐじゅっ、じゅろおお……ぐぢゅぷっ、ぢゅぼおお……」

彼女の口内で互いの舌を絡ませて唾液を泡立て、そのまま有菜の身体を布団の上に横たえる。押し倒された、ということに有菜は気づいているのかいないのか、彼女は驚いた様子も感じさせず、握りあつた片手は指をしっかりと絡ませてきた。それと同じように、唇に突き入れた舌もねつとりと絡ませられる。さらに――。

「んうっっ!! んっ、れろっ……れるっ、くちゅっ……」

「はあっ、あおおお……んおっ、おむっ、んじゅるるるうう……」

音を立てて唾液を吸り上げた有菜が腰を浮かせ、ゆっくりと振り立てながら、修司のそ

そり立つ陰茎を擦り上げた。熱く濡れた粘膜と陰毛の感触が押しつけられ、しかも吸いつくようにヌメリを塗り広げ、愛液塗れのキスをされているようだった。

「はあっ、あむっっ……ちゅぶうううっ、んじゅっ、じゅるうううっ……」

「んくっっ……ふあああっっ！ あひっ、んっ、あ……ん、修司、さあんっ……」

今度は服でも隠れないような位置に口づけを浴びせて、キスの痕を刻み込む。白くほっそりとした首筋に二つ、赤い線を残すと、フルルツと身を震わせて有菜がしがみつき、彼女も唇を首筋に寄せてきた。

「お返し、です……んむっ、ちゅっ、ちゅうう……ちゅぼっ、ちゅうう……ちゅぼっ、んっ、れろお……ちゅっ、んちゅっ、ちゅぶうう……」

「うっ、はっっ、あああっ……すげえ、いいっ……」

柔らかな唇に肌を咥え込まれ、痛いほどに吸い上げられて、解放された瞬間に舌が這い回る。蕩けるような甘い感触、そしてすぐに続く痛み、その繰り返し首筋に何度も何度も、彼女の熱い愛情を注ぎ込んでいた。

「はむっ、んちゅううう……んっ、ふぁ……ふふ、いっばいつけちゃいました」

「ああ、わかる……もうあつちこつち、ジンジンしてんだし……すげえ気持ちいい」

学ランの襟でほとんど隠れるかもしれないが、それでも感じられるキスマークは十カ所ほど、首から胸にかけて刻まれていた。それを指先でなぞり、どちらからともなく微笑みあつて唇を吸いあう。ジュパジュパと唾液が溢れて顔を汚し、布団に伝いこぼれてもお構

いなしで、有菜の伸ばした舌が唇を舐め回してきた。

それを搦め捕り、少し強く吸い上げて、唇と歯で優しく甘噛みして擦り立てる。片手で乳房を揉みしだくと、唇を吸ったまま彼女がビクンッと身体を弾けさせ、淫唇でペニスを擦りながら脚を腰に絡めてきた。寝転んだまま肉竿の裏側を擦る、変則的な素股の動き。それはまるで擬似的な挿入の感覚を思わせ、先ほどの口奉仕で蕩けそうだった肉棒がはち切れんばかりに、さらに大きく膨らんでゆく。

「あむっ、じゅぶっ、ぐちゅっ、ぐちゅじゅぶっ……ぶあっ、あはっ、はあんつつ！  
んっ、修司さん、修司さあんつつ♥」

スリスリと激しく擦られるペニス、震える血管が粘膜裏に絡みつかれ、睾丸の奥から熱い進りが込み上げるのはつきりと感じる。そして彼女が挿入をせがんでいるのも、その蕩けた顔と声、甘える仕草からもわかっていた。だが――。

（ああっ、もうつつ……めちやくちや可愛いつつ、有菜っ……有菜あっ！）

耳を舐め、頬に軽く口づけ、首を舐めながら鎖骨を擦り、顔を下方へ滑らせる。遠ざかるペニスを求めて彼女が腰を振り、脚をくねらせるのを断腸の思いで振り切り、修司は新たな標的に唇を寄せた。

（ふおおおおつつ！ 有菜、やつばでけえつて……制服の上からだとあんまわかんないのに、このポリリュームツ……着痩せするって、こういうことなのか……）

学校でも触ることはあれど、脱がせたことはないため、こうしてまじまじと見つめるの

は初めてだった。寝転んだことで、多少は自重に潰れる乳房だが、形の美しさはほとんど損なわれていない。いつも制服の下に手を滑らせて揉みしだいていた、圧倒的なポリウムと迫力を誇る母性の象徴が、しつとりと汗ばんだ肌の白さをほんのりと桃色に火照らせ、凝視する修司の視線を感じているようにピクツと跳ねる。Eカップだと聞かされている柔肉がたわんで揺れ、白肌を微かに波打させた。

喫茶店での行為のせいなのか、キスのせいかわ、それとも口奉仕でこうなったのか。真っ白な肌とほとんど遜色ないほど薄い、淡い桜色の乳輪が修司を誘惑するように、プツクリと艶めかしく膨らんでいる。その中央では小指の先ほどに尖った小ぶりの乳首が、サーモンピンクに色づいて天を突き、健気にプルプルと小刻みな痙攣を見せていた。

「はあっ、んじゅっつ……んちゅっ、れろっ、ちゅばあ……」

「きやううんっつ?! んっ、ひっつ……んはっ、はあんっつ! あっ、んああっ!」

辛抱たまらずむしゃぶりつき、舌の腹を大きく広げながら硬くさせ、可愛らしく震えるニプルを中心に、乳輪全体を余さず舐め上げる。汗の味が舌に広がり、しょっぱいはずなのにどこことなく甘さを感じ、引いた腰の奥で肉棒が熱い疼きをもらっていた。

「はうっ、あっ、んうっ……んくううっ! はあっ、あんっ、あっ……っつ」

片方の乳房を舌で舐め回し、もう片方は乳首を重点的に、けれど優しくゆつくりと扱いてゆくと、有菜の小刻みな嬌声が耳に響く。そっと秘部に指を這わせると、すでにおもらしをしたように太ももまでがピシヨピシヨになり、シーツにまで透明の雫が滴り落ちてい

た。粘膜を指腹で撫でると、キュッと太ももが締まってさらなる愛撫を求めるように、淫唇が押しつけられた。指に押し込まれた膣肉がわななき、粘膜壺に溜まっていた愛液が勢いよく噴きだし、這わせた手の平に降りかかってくる。

「んはあああ……あうっ、あつ、ひつつ……ん、そ、こお……はあつつ！ あいつ、んつつ……だめ、だめで、すつ……あうんつつ！ んっ、イ……イッ、ちゃ……はあんっ！」

爪先で淫核を軽く突いた瞬間、絶頂を訴えて有菜が小さく呻いた。だがそれこそ、修司が待っていた彼女の反応——そのまま愛撫を継続し、乳房をペロペロと舐め上げる。

「んれろおおおつつ、ぐちゅっ、ちゅぶつつ、んれろっ、れりゅっ、ぢゆるうう……」

「くひゅうううつつ?! だ、めつ……だめでつ……んひいつつ！ はっ、くつつ……くつつ……くつつ……!! はあつ、んっ、イッ……あいつつ、くつつ……イクツツ……」

乳首扱き、乳首舐め、さらに淫核を捏ねながら淫唇を優しく穿<sup>ほじく</sup>られ、切ない悲鳴を上げながら有菜は布団の上で、ビクビクツと腰を痙攣させて跳ねた。なんというか、挿入されるより早くイッてしまったという不本意さを感じられる仕草、そして彼女自身の抵抗するような声音だったが、修司としてもこうせざるを得ない理由がある。

（せっかくの、大事な初体験なんだ……挿れて即暴発とかしちやったら、もう……ああああつつ、想像したくもないつつ！）

優しい彼女は早漏などと罵<sup>ののし</sup>つたりはしないでだろうけど、彼女の前ではなるべく、いいところを見せていたいというのが彼氏としての男心だ。熱烈フェラですでに暴発寸前になっ

ていたからじつくり時間をかけて愛撫し、なんとか射精感を遠のかせることにも成功している。そして喫茶店に引き続いて有菜を絶頂に導いて、彼女の身体の準備も整えた。

「んはっ、はあっ……しゅ、修司、さん……も、じ……焦らさ、ないでえ……」

クタアツと脱力し、布団の上でヒクつく彼女が恨みがましく、けれど可愛らしく甘えるように訴える。頬を羞恥で赤く染め、修司をその気にさせようと思っているのか、震えながら脚を大きく開き、ドロドロになった秘部に両手を添えて左右に割り開く。

「私……あ、有菜は、もう……準備、できていますから……」

「——っっ！」

お嬢さまによる懸命の誘惑は、あまりにも淫靡で卑猥な行動だった。清纯を絵に描いたような有菜が、男を誘って秘部を開く——見た目と行動のギャップにペニスがいきり立ち、お腹をペチペチと叩きながら、血管を脈打たせて彼女の前で勇ましく屹立する。

「あ、ああ……その、有菜っ……や、優しくするからっ！」

「——はいっ！ でも、心配はしていません……修司さんは、いつも優しいです」

淫唇を割り開き、はしたない蜜涎をこぼしながら、ニッコリと微笑む有菜。その笑顔に惹かれ、自然と身体が動き、優しく口づけた。

「あんっ……んむちゅっ、はあ、んぷっ……くちゅう……」

キスをして手を握り、片手に枕元のコンドームを取ろうと腕を伸ばす。しかしその手が有菜の手がそっと押し止め、唇を離してささやきかけた。

「いえ、それは……その……」

表情を暗くし、羞恥と、わずかの不安を含んだ視線で、彼女がこちらを見つめてくる。

「え、と……まさかと思うけど、し、した……ぎ、とかも……」

「そつ、それはありません！ 父や母も、それはさすがにお断りしていますから！」

まあたしかに、親の監視の下に行われている仕事なら、際どい衣装で娘の柔肌を晒すなんてことも、まずあり得ないはずだ。ではなぜだろうと、首を捻る。

「もちろん、衣装自体はきつちりとしたものばかりですし、デザイナーさんがデザインしてくださる、非の打ちどころもない作品ばかりです。でも……」

そこでようやく、彼女が表情を暗くする理由と、内緒にしていた理由が明かされた。

「こうして、自分の姿を大勢に晒す仕事を……修司さんが、快く思われないかと……考えてしまいました。もしそうであっても、私は仕事をやめるわけにはいきません。富永の娘として、少しでも会社の力になりたいですから」

そこには、一学生ではなく社長令嬢としての、有菜の姿が存在していた。

「ですが、それが元になって修司さんと仲違いする——それを私は、恐れたんです。それだけでなく、もしも修司さんが私を責めたとしたら、私は修司さんのことをどう思い、どう嫌ってしまうのか……それを、考えたくなくて、言いだせなかつたんでしょう」

そこで有菜がまっすぐに顔を上げ、視線を合わせてきた。

「——私がこのような仕事をしていたこと、どう思われましたか？」

もしも修司が有菜の望まぬ答えを告げたなら、ある行動もやむなしと思っていたのだろう。それだけの覚悟が、彼女のキリリと引き締まった唇から感じられた。

（……そうか、俺がデートのときにあんなこと言ったから、そこまで……）

自分が余計なことを言ったせいで、また彼女に氣遣わせてしまった。それどころか、こんな申し訳なさそうな顔までさせて、己の不徳をこれでもかと思ひ知らされる。

「いや、驚いた……もちろん、悪いなんて思わない。それどころか、尊敬する」

だからこそ修司は、彼女の気持ちを誰よりも真摯に受け止め、感銘を受けたのだ。彼女がそうまでして働いていたというのに、自分がバイト一つせずつに過ぎたことを、深く恥じたくらいである。そんな修司の答えは、彼女も予想外だったらしい。

「ほ……本当、ですか……？」

「ああ、本当だって。むしろ広告見たやつらに、俺の彼女はこんなに可愛いんだぞ！ つて自慢してやりたいくらい。その服だって、すっげえ似合ってるしさ」

少々ムキになって声を張ると、本心からの言葉だと彼女も感じてくれたらしく、驚きと歡喜に見開かれた瞳が、キラキラといつもの輝きを取り戻してゆく。

「ほつ、本当に本当ですか？ 仕事のたびに、新しい服を着られて喜んではいやいだり、衣装を全部いただいで部屋に飾っていて、それを見られるのが恥ずかしくって修司さんを部屋にお招きできなかったりしたりしたのも、変に思ったりしませんか？」

「えっ——お、おう、もちろんだぞ……うん」

そこは、部屋に飾ってある衣装から、アルバイトに気づかれると思ったから——とかじゃないのか、と修司はちよつと首を傾げる。いや、それで推理できるほど自分は頭がよくないと思われているのだろうか。だとすれば、次のテストでは本気にならざるを得ないだろう。もつとも、本気をだしたところで、不得意科目の赤点スレスレの点数が、平均スレスレで届かないレベルにまで微上昇するだけなのだが。

(あー、でも軽くはショックかな……まあ仕方ないけど)

彼女はきつと、九割くらいは自分を信じてくれていただろう。けれど残り一割の可能性を心配し、打ち明けてはくれなかった——まだまだ信頼されるには足りないのだと、彼女を責めるのではなく、自分が情けなくなる。

ただ、それよりも気になったのは有菜が、もし修司が狭量だった場合に、自分がどのように思ってしまうのかを恐れたということだ。いまの姿が彼女の演技だとは思わないが、彼女としても自身の在り方を、気に入ってはいるのだと思う。だからこそ彼女は、誰かに対して嫌悪を抱いたり怒ったりするという感情を、持ちたくはないのだろう。

以前のデートのときもそうだったが、有菜はやはり、自分が負の感情を抱くこと、そしてそれを見せることを、極端に恐れているような気がする。

(……それは違うだろ、有菜……)

こうして立派に働いている彼女を前に、どの口が立派な説教を行えるのかと思うが、それでも有菜のために、これだけは伝えておきたかった。

「あー、あのさ……えっと、別に怒ってもいいんだぞ？俺が有菜の行動に対して……たとえば今回みたいなアルバイトを咎めたりしたらさ、そんなのあなたには関係ない！つてはつきり言い返してくれれば」

「えっ……は、い……でも、私はそんなこと——」

（うぐっ……やっぱそうくるか。強情だなあ、ほんつと……）

否定しようとする有菜に、修司は少し気恥ずかしいのを押し隠して、彼女が怒るべき点をあえて指摘する。

「いまだってそうだ。俺がここにいる理由、もう察しがついてるんじゃないか？」

「それ、は……はい、おそらくあの電話で、このことを知って……」

「そうだ。えっと……せつかく夜に話してくれるって言ってたけど、この際だから聞いちまうぞ？あの電話で聞こえた男の声、あれはなんだ？」

うわー、と思わず頬が熱くなる。彼女の感情を煽るためとはいえ、彼女を疑っていますとアピールするのは申し訳ないと同時に、ものすごく恥ずかしかった。しかも、その疑惑を感じたのが事実であるだけに、その羞恥は倍にもなつて身を焦がす。

「——っ！あ、あれは父の声です！仕事のお話ですから、送り迎えは父にしてもらっているんです。いまでも、スタジオのほうで先ほどの方とお話されてるはずですが……修司さんがお会いしたければ紹介します。私はなにも、やましいことはしていません！」

（あ、やっぱり？まあ、そんな気はしてただけ——）

とりあえず、男性の声が父親だったことを確認し、安堵する。実際、いまの有菜の言い分は彼に伝わっていないのだから、これが誤魔化しだとすれば、本人に会ったとき矛盾が生じるだろう。つまり、有菜が会わせても平気だと言うなら、これは本当なのだ。

「ひどいです、修司さんっ……私のことを、そんな不実な……はしたない女と、思っていたなんて……」

「——あ、ち、違うって！ いや、違うないけど！ 勢いでここまで来ちゃったけど、有菜がそんなことしないってのは、とっくに確信してたんだよ！」

やばい———と思ったときにはすでに、彼女は顔を伏せて声を震わせていた。ここまでのつもりはなかったのに、怒らせるつもりが泣かせてしまうことになるなんて。

「ごめんっ、本当にごめんっ！ ただ、すごく気になって……やっぱり俺、有菜のこと好きすぎてさ！ 今日のこともし楽しんで、それでがっかりしたのと不安が一緒くたになって、焦りまくってさ！ つい、来ちゃったって言うか……あ、わ、悪かった！ なんならもう、すぐに帰るから！」

フルフルと彼女の肩が震えだすのを見て、それを支えることもできずに、修司はひたすらに取り乱してしまう。どうすれば有菜が泣き止んでくれるのか、それがまるで想像つかなかった。そういえば、前に喫茶店でも同じようなことがあって、そのときも自分はこうしてひたすら謝り倒し、なんとか宥められたっけと思いだす。

「それに調べたらなんかホテルだっていうから、それでも余計焦っちゃって！ でもそう

だろっ？ 有菜とはまだホテル行つてないし、有菜を初めてホテルに連れてくのは俺だつて、勝手に決めてて……それで、させるかーっ！ って思ったつていうか……ああ、なんか独占欲ありすぎだよな、俺っ？ けど、それくらい好きなんだよっ、悪かったよ！」

もう謝罪や言い訳というより、逆ギレのような迫力で愛の告白を続けてしまう。だがそんな修司の言葉を聞いても、有菜は顔を上げずに伏せたままだった。

「この、ホテルには……撮影スタジオがありますから。このメイク室も、撮影や結婚式用と伺つてます。先ほど聞かれたように、仕事のお相手も女性の社長さんでいらつしやいます……それでも修司さんは、まだ私を疑つてしまうんですか？」

「疑つてないっ、全ッ然疑つてないよ、有菜あつ！ 頼む、機嫌直してくれっ……なんでもするから、この通りっ……」

と——修司がそう言いだすのを、待つてでもいたのだろうか。

「——なんでも、本当ですか？」

そこでようやく有菜の顔が上げられ、しかもよく聞けば、いつの間にか声が震えていないことに気がつく。さらに、目にも涙の跡など残つてはいない。

（あつ、やば……：：：：：：：：：：：：：：：そういや、前もそうだったのに……あれ、俺つて単純？）

またしても彼女の嘘泣きにやられた——と考えてから、いいやと思ひ直す。

有菜がショックを受けたのは、おそらく本当だろう。それをこんな形で許してくれるなら、騙されて彼女の要求に応じるくらい、安いものだと。

「お、おう、なんでもするぞ。俺の有菜への熱い想い、見せてやるっ……のわあっ!!」

胸を張って言い切った瞬間、椅子から跳ね上がった有菜が抱きついてきた。驚く暇もなく唇を重ねられ、少し冷えた、けれど柔らかな粘膜の感触が伝わってくる。

「あむうう……んちゅっ、ちゅむっ、ちゅっ……ちゅぱっ、んむうう……んっ……でしたら、教えてください……修司さんが、どのくらい私を好きなのか……」

手を取られ、ズボン越しの彼女の秘部へそっと導かれる。

（うっわ……有菜、これ……マジで?）

驚いた顔で、唇を触れ合わせたまま彼女を見つめていると、白く美しい頬がすぐさま赤く染まっていった。それもそのはず、触れただけでクチュウ……といやらしい水音を滲ませた淫裂は、まるでおもらしたように湿っており、見れば黒い布地には水に濡れたような染みが、大きく広がっているのだから。

「わ、私だつて……今日は修司さんと会えるの、修司さんのお家に……お部屋にお邪魔するのを、すごく楽しみにしていたんですよっ! それを諦めかけていたのに、こうして会いに来てくださったら、き……期待、してしまうに決まっていますっ……」

改めて彼女を見ると、給仕服という男装に、たまらない魅力を感じさせられる。

ズボンを穿いても隠れない、彼女の下半身の肉感的なエロティシズムが。シャツとチヨッキを盛り上げる、柔らかそうな二つのたわわな実りが。そして美しい黒髪をまとめアップにした、新鮮な愛らしさが――。

「はうんっ……んっ、あ……ふふ、修司さんもすっかりその気です♥」

「お、お恥ずかしい……いやだつて有菜、すっげえ可愛いし……」

修司の性欲をくすぐり、たまらず勃起してしまう。抱き合つて、それを彼女の太ももに押しつけると、硬い昂りに布越しの柔肌を擦られ、有菜が腰をくねらせて甘く喘ぎをもらした。熱い吐息が鼻先にかかり、潤んだ瞳と視線が絡み合う。吸い寄せられるように顔を寄せると、瞳を閉じて彼女の唇も、上向きになってこちらに近づいてきた。

「あむっ、んじゅうう……じゅぶっ、んっ、くふうんっ……んあっ、はっ、修司、さぁん……んふうっ、んちゅっ、ちゅむう……ちゅぶっ、ぐじゅぶう……」

扉に鍵はかけていない、もしかしたらここを利用する他の誰かが、入ってくるかもしれない。けれどそれさえも気にならなくなるくらい、本当に久しぶりの激しい口づけに、頭の中がトロトロと蕩かされてゆく。

（前、したのって……もう、五日前だっけ、六日前だっけ……）

ヌルつく舌の感触が自分の口腔を弄り、舌を掬め捕つて吸い上げ、唾液の波がチャプチャプと卑猥な音を響かせる。抱き締める身体の柔らかさに背筋が震え、ズボンの中では勃起がさらに激しく脈打つて天を突き、ビクビクと跳ね震えていた。

（こ、このまま、イッチまうくらいっ……キス、気持ちいいっ……有菜、有菜っ……）

「んむっつ、ふみゅううっつ!! んくっ、んふううっ……くくくくっ♥」

いつものように髪を梳いて頭を引き寄せようとしたが、結い上げた髪を掠めた手が、剥

きだしに晒されるうなじを撫で上げてしまう。けれど、髪感触とはまた違うその滑らかな肌が心地よく、修司は指を這わせて丁寧に撫で上げ、指先から快感を味わうように何度も何度も、その部分を舐めるように擦り上げた。

「んくっ、んふううつつ、ふあっ、あっ……んううつつ！」

その刹那、腕の中で有菜の肢体が、ビクビクッと跳ねて硬直する。甘えるような吐息が口端からもれ、溢れるような甘酸っぱい汗の匂いが服の隙間から漂い、やがてくったりと脱力した彼女の身体は、服の上からでもわかるくらい熱く火照っていた。

（え、と……え、嘘だろ？ いや、だつてまだ……キス、くらいで……）

先ほどは、たしかにイキそうなくらい気持ちいいとは思ったが、まさかこんなに簡単に——そう思いながら、もう一度彼女の首筋を、優しく撫で上げてみる。と——。

「ひやふううんつつ♡ あっ、んっ……だ、め……す、少し、待つてえ……んくっ、ふあっ、はあっ……あぁ、うううんっ……」

たちまちいやらしい声を響かせて、修司の手から逃れるように、有菜が身を振る。絶頂後の敏感な身体を抱いて、彼女はいったん身を離そうとする。けれどそれを見た瞬間、場所や状況を考えようとしていた修司の理性は、跡形もなく吹き飛んでいった。

「……言つたよな、有菜？ 俺がどれくらい有菜を好きなのか、教えてほしいって」

「んくっ、えっ、あ、その……い、言いましたけれど、修司さんっ……もう、少しだけ……ひやうううつつ?! んっ、はあっ、だ、だめですつ……あうううんつつ！」

机に押し倒すようにして、背を向けかけていた彼女の身体を背後から抱き締める。

「悪い……けどもう止まんねーって！ だって俺も、今日有菜とこういうことすんの、ずっと楽しみにしててっ！ もう色々と我慢しっぱなしだったんだからな！」

背後から胸を揉みながら、チョッキとワイシャツのボタンを器用に外す。ブラをしていてもなお、弾むように揺れてこぼれた乳房に手を這わせると、清潔な下着の隙間から指を捻じ込んで柔肌を揉みしだく。

「んひやうううっつ!! あうんっ、んっ、はっ……しゅ、修司、さ……んっつ！」

艶めかしく眉根をひそめ、困ったような表情が後ろを向いた。そのあごに指を添えて引き寄せ、唾液塗れの唇を強引に奪う。ムニユンツと柔らかな反応が返ると同時に、有菜の瞳はすぐさま蕩けて細められ、重なりあつた唇に、チロチロと温かな粘膜塊が這い寄ってくる。それを吸い上げるまでもなく、唇をこじ開けて舌先が滑り込んできた。

「あおうううう……んくむっ、んじゆるうっ、じゆるぼおお……ぬぷっ、んちゅぷう……んひゅっ、ふあっ、あええ……んえろおお……れろっ、ちゅぷうう……」

キスしたまま、豊乳を揉みしだいたまま、自由にさせた片手を給仕服のズボンに触れさせる。ベルトもないズボンはボタンを外すだけで簡単に緩まり、ファスナーを下ろすと、羞恥に悶える彼女が腰をくねらせ、突きだされた尻房に股間が刺激される。

「んんうううっ、んうむっ、ふみゅううう……んっ、くふううんっ……」

自分だけイカせて、こっちがイッてないのはずるい——とでも言いたげに、有菜がうっ

すらと瞳を開いて抗議してくる。ズボンの生地に浮き上がる尻肉で修司の勃起を擦るのは、こちらの射精を促す彼女のささやかな抵抗ということらしい。

そんな彼女の、数日ぶりに感じる積極性に感動すら覚えながら、夢中で舌を伸ばして彼女の口腔を吸り上げる。甘い唾液の奔流の味も、なぜかすごく懐かしく感じられた。舌ごと唾液を吸い上げ、ズチュツ、ズチュチュツと水音を響かせるたびに、音で耳を愛撫されているかのように、有菜がピクンツと肩を跳ねさせて悶えてみせる。

「はむちゅううううつ……んじゅるつ、じゅるるううつ、ずちゅつ、ぐちゅうう……んんつ、ふつ……んぐううつ、はあむつ、あむううつ……じゅろつ、れろおお……」

それでも、彼女の唇の動きはまるで衰えず、むしろもつとしてくださいとおねだりするような動きで舌を吸い、唇が食まれてゆく。互いの口を甘く噛み合いながら、修司は有菜のズボンの後ろに手をかけ、緩んだそれを勢いよく下ろした。

「んううう……はふつ、ひゃうつ……んんつ、あつ、くふうんつ……」

ピンクの上品なショーツに包まれた白い柔肌が空気に晒され、有菜がお尻を振って羞恥を露わにする。けれどそれも一瞬のこと、宥めるように修司が髪を梳き、頭を優しく撫でると、とたんに猫のようにフミュウ……と鳴き、唇を離して腕の中に弛緩した。

半脱ぎ状態で太ももに引つかかるズボンの股間部分からは、ショーツとの間にねっとりとした淫らな粘糸が引き伸びて、濃厚な女の匂いが立ち上る。濡れたショーツに浮かぶ肉裂をなぞると、有菜がピクツと腰を跳ねさせて腕の中で暴れた。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※ 二次元ドリーム文庫とは異なる。未満の方購入できません。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! **19日発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!

**ヴァルキリー**

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

**cranberry**

<http://www.cran-berry.com/>

**mille-feuille**

<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元  
ドリーム**

<http://www.2d-dream.jp/>

キルタイムコミュニケーションの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!